

城山三郎 毎日が日曜日



毎日が日曜日

城山三郎

新潮社版

まいにち
毎日が日曜日

昭和五十一年四月十五日 発行
昭和五十二年一月二十五日 二十一刷

定価八五〇円

著者 城山三郎しろやま さぶろう

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話業務部(〇三)二六六―五二一
編集部(〇三)二六六―五四一
振替東京四一八〇八番
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社
通信保宛御送付下さい。送料小社負
担にてお取替えいたします。

長編小説

毎日が日曜日

目次

一部屋の主	万一の事態	死の駐在	空白の日課	職務外の職務	世話の報酬 アランド	单身赴任	随行之身	私物	退職の夜	就学命令	前社長夫妻	定年の設計	転勤の朝
-------	-------	------	-------	--------	------------------------------	------	------	----	------	------	-------	-------	------

152	144	133	124	114	99	90	77	66	52	39	28	16	7
-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

社長との夜	163
趣味のひと	177
テレタイプ	193
外三〇八号室	205
天気図	217
うちの会社	227
海外研修生	236
人材銀行	248
戦列外の身	262
事故処理	275
悪戦苦闘	283
不法投棄	291
次の辞令	298
あとがき	306

装幀 三尾公三

毎日が日曜日

転勤の朝

東京駅の新幹線ホーム。その中ほどの一ヶ所に、半円形に十人ほど黒っぽい背広の男たちが立っている。よくある転勤の見送り風景である。

半円の円心のところ、ひかり号のグリーン車を背に、送られる沖直之が、複雑な気持で立っていた。いや、複雑というより、むしろ、茫然といった気分に近い。

その気分は、妻の和代も同じであった。沖から少し離れて立ち、見送りの客に、愛想笑いをつくって、札を述べてはいるが、客の切れ間には、放心した表情になる。そして、隣りに立つ娘のあけみの首を片手に強くかかえこんで、はっとしたりしている。

あけみは、白いマスクをかけていた。風邪のように見せかけてはあるが、そうではない。言語に問題があるので、話しかけられるのを避けるための工夫であった。それだけに、マスクの上からのぞくあけみの眼は、ひときわ大きく、父親である沖の庇護を求めて光った。

隣りホームに、次発のひかり号がすべりこんできた。その音にまぎれるように、和代が身を寄せ、ホームの時計を見上げていった。

「おそいわね。忍はどうしたのかしら」

長男で高校一年生の忍は、いったん学校へ出てから、早速してホームへかけつける約束であった。

「来るのをやめて、勉強を続けてるんじゃないか」

「とんでもない。あの子は、なんとか理由をつけて、一日でも学校を休みたい口よ」

和代は、びしやりといった。

「そんないい方はよせ」

その調子では、先が思いやられると、沖は低い声でたしなめた。

「でも、本当なんだから。むつかしいさかりの子供二人かかえて、わたし、たいへんだわ」

うらみとあまえを半々にこめてつぶやきながら、和代は親指を立て、あけみの頬に押しあてた。言葉を封じられたあけみの瞳が、白いマスクの上から悲しそうに両親を見くらべる。

京都支店長としての赴任命令。子供たちの学校のことや、家のことなどから、沖の単身赴任と、二人でとにかく話をまとめたはずなのに、ここまで来ても、和代の顔にはまだ未練が残っている。

ホームにアナウンスの声がひびく。その声にかくれて、和代はささやく。

「いいなあ、あなたはひとりで京都。わたし、代りたい」
わざと、やんちゃ坊主のようにつぶやく。

「まだ、そんなことを。あそびに行くんじゃないぞ」
その声がかきこえたのか、一メートルほど離れて立っていた同期入社生の十文字が、ふいに長い首をのぼし、ぎくりとするような言葉をはさんだ。

「沖君、京都へ行けば、毎日が日曜日だな」

声には、冷やかなひびきがあった。社内では毒舌家であって、通っている十文字である。それにしても、気色ばむ沖に、十文字は、

「支店長として勇躍赴任しようとするきみに、まるで水をかけるようなことといって、失敬」

詫びた形だが、そこでまた、にやりと笑って、くり返し

「けど、ほんとに、そうなんだ。毎日が日曜日のようなものだ」

「それは、どういう意味だ」

「まず、仕事の量だ。本社や海外支店にくらべりや、問題にならん。その証拠に、総合商社で京都に支店を置いてる店は、数えるほどしかないからな」

沖は黙った。和代も、少しふくれている。夫をけなすと

は何事と、とたんに沖の味方になっていた。すかさず、十文字はその和代の顔にも浴びせかけた。

「奥さんを前にしてわるいけど、あの支店の実質は、出張所なみか、それ以下。不況のたびに、閉鎖のうわさがちらついてきた店ですよ」

和代は、やや受け口の下唇（しちちぽ）をかんで、

「……そうですの。それなら、主人も少しは荷が軽くて」
十文字の向うから、二度、咳（せき）ばらいがした。十文字をたしなめている。

背も首も顔も長い十文字は、鶴が立つというより、大きな蛇が垂直に立ち上ったように見えた。そのかげに、咳ばらいの主が居た。やや猫背で、ごま塩頭の貧相な男。度の強い眼鏡を光らせ、咳ばらいこそ重ねたが、しかし、何もいわない。部厚いレンズに遮られ、眼の表情もわからない。十文字は、一瞬、黙った。ホームの雑踏がよみがえる。

転勤の季節ではなかったが、それでも、ホームには、他に二組ほど似たような風景があった。おじぎや握手が交わされ、笑声が散る。それにくらべれば、沖をめぐる輪は、人数も少なければ、物静かであった。超一流の総合商社らしく、とりすましたとも、クールなともいえる。いや、そこに左遷のにおいがあるとすれば、なおさらである。

黙りこんだ沖夫婦に、十文字がまた首をのぼしてささやきかけた。

「けどなあ、奥さん。やっぱり、京都支店長いのは、栄転かも知れませんか」

たしなめられて訂正したかっこうだが、しかし、素直にはきけない。果して、十文字はすぐ、ひとりごとのようにいい足した。

「厳密にいうなら、今度が栄転というより、次の栄転へのチャンスだな。それも、心がけしだい、大きな出世の道がひらけるかも知れん」

沖は顔をしかめた。いままさ、出世などどうでもよい。持ってまわった言い方が、気にさわる。

見送り人には氣をつかいながらも、沖は低く強い声で、十文字にいった。

「どういふことだ。はつきり、いつてくれ」

十文字は、単なる毒舌家というだけでなく、社内のあるところに妙な情報網を持っていて、ときどき、ひやりとするような秘密の情報を伝えてよこす男であった。

長いあごをふつてうなずきながら、十文字はいった。

「きみを京都支店長に選んだのは、コンピュータだ」

「……うん」

人事に関する資料は、すべてコンピュータに記憶されている。人事異動に際しては、そのコンピュータが作動する……。

「コンピュータが、どういう条件で、きみを拾い上げたか

思う」

「……………」

「まず、四十代後半ノ男。これで、六百二十人を拾う。その中から、四級職というので、約三百五十人」

扶桑商事では、大学卒は八級職で入社する。そして、十五年間は競争はおあずけ。同期は一斉に昇格し、十五年目に全員、六級職に達する。そこで、ヨイ、ドン、のピストルが鳴り、はげしい実力競争がはじまる。業績抜群の者は、A級部長である一級めがけて級をかけ上って行くのに対し、落伍者はいつまで経っても、その六級のままで、五十七歳の定年を迎える。

四級職とは、小支店の支店長か出張所長、本社のC級課長などに相当する身分である。四十八歳で四級職という沖の場合、まず可もなく不可もない行程といえた――。

十文字が続ける。まるでコンピュータ室に居て目撃してでもいたかのように。

「次のふるいは、現ポストに定着ヲ必要トシナイ男。性格条件としては、アイソガイ、ヨク、キガツク、それに、マジメ。そして、とくに決め手となったのは、ムクチという項目だ。コンピュータの磁気ドラムの中に、きみは無口、口ガカタイという風に記録されている。そこで、きみのカードが、いちばん上にとび出してきたんだ」

「まさか」

「うそじゃない。人間のやる人事なら、これまで外国で穀物や飼料の買付ばかりやっていた男を、京都支店長へ選ぶものか。コンピュータだから、前歴にとらわれず、私情にくもらされぬ判断が、できたんだ」

「私情？」

「そう。きみは、五年間の海外生活を終わって、やっと自分の家へ落着いたとこだ。建てたばかりで海外へ出され、これまで住めなかったなつかしの我が家へな。外国帰りの一家四人がはじめてマイホームで暮しかけた矢先、京都へ転勤させるなんてことは、人間の感情ではできんことだ。それが、コンピュータだから、無口ソノ他の必要条件だけで、一万一千人の中から、オキ ナオユキの名前を、機械的につまみ上げてきたんだ」

十文字のうすい唇は、テレタイプのように動いた。

沖は、おし黙った。「いいかげんなことをいうな」とでも、いい返したいところだが、声にならない。巨大なコンピュータの幻に圧倒された。

ただ、和代が会社のいりくんだ話には興味を持たず、少し離れてくれたのが、救いであった。

沖は、つぶやくようにいった。

「おれは、そんな無口じゃない。いや、仮に無口だとしても、コンピュータは、なぜ、無口ということにこだわるんだ」

「それは、京都支店の特殊性が要求するんだ」

「という」と

「さっきもいうたとおり、あの店の仕事は、ぼちぼちだ。むしろ、仕事以外の仕事の問題なんだ」

「わからんな」

「これほどこいても、まだ、わからんのか。外国へ行つて、きみ、少し離れたのちがうか」

十文字の唇は、また、コンピュータに接続する端末機のように動き出した。

「京都は、日本の奥座敷だ。外国からのV.I.P（最重要客）も、キョウト、キョウト。国内の大事なお得意さんも、祇園で接待されるのが、最高の夢。世間に目立たぬように、その設営をするのが、京都支店長の重要任務のひとつだ。接待役というか、お相伴役には、出張所長という肩書より、支店長の肩書の方が、お客さんも満足するからな」

十文字は、沖を斜めに見て、

「怒るなよ。おれは、ほんとのこと、いったまでさ。今後、接待費が切りつめられると、よけい、接待役の任務はむづかしくなる」

「おれには、そんな役はつとまらん」

「まあ、よくきけ。大事な話は、その先にある。それは、トップの世話だ。京都は、社長や、おえら方たちが息抜きするところ、秘密のあそび場所なんだ。会社の関係者は居

らんし、マスコミも追いかけて来ん。安心して羽をのばせる聖域なんだ。京都支店長は、そのお世話をしながらも、見たりきいたりしたことは、一切口にしてはならん。トップの恥部をかくしながら、自分は啞^{おろ}になれる人間でないといかんのだ」

「おれには、とても……」

「まあ、よくきけ。トップの恥部をつかむだけに、忠勤を励めば、そこは、人間と人間。可愛いやつということになる。コンピュータを通り越して、拔擢^{はくしやく}の道がひらける。左遷どころか、心がけしだい、大栄転へのチャンスになるというのは、そのところだ」

茫然としている沖に、

「おれは、いいかげんなこといっとるのとちがう。現に、相談役は社長当時、京都あそびが過ぎて、引退後はそのまま京都に沈没してるじゃないか。いまの社長も、関西での泊りは、大阪でなくて、京都だ」

これほどいってまだわからんのかと、いわんばかりに、十文字はたたみかけた。

沖は、ようやく答えた。

「しかし、なんといわれようと、おれには、そんなお守りはできん」

「また、おれには、か。おれには、おれにはと、自分からきめてかかつては、なにもできません。おれたちには、もう、

先はあんまりない。ここぞというチャンスは、目つむつても生かしておかんと、あとで、ひどく後悔するぞ」

「しかし……」

沖は、体が熱くなってきた。沖の性分としては、目をおおい、耳をふさぎたくなる話である。それに、どこまで本当の話なのかわからぬ。好意だけで忠告してくれているとは思えない。むしろ、そんな風にかかわれ、侮辱されている氣もした。その氣持が強まって、沖は最後に吐きすてるようにいった。「くだらん」

それと同時に、十文字の向うでも、咳ばらいがした。一度、また一度。十文字は、長い首をひねるようにして、そちらを見た。

「笹上さん、風邪でもひいたんですか」

「う、うーん」

笹上は、度の強い眼鏡ごと、首を横に振った。

「それなら、なんか、おっしゃりたいんですか」

笹上の眼鏡が、また強く横にゆれた。

「うーん」

十文字は、沖に顔を戻し、声を落として、

「相変らずのウーさんや」

笹上丑松は、沖たちより、九年先輩である。かつての沖の上司であり、和代との結婚の仲人もしてくれたが、いまは部付で、身分も五級職と沖にさえ追い越されている。あ

だ名の「ウーさん」は、丑松という名前のせいだけではな
い。いつも「ウー」というばかりで、イエスかノーか、は
っきりしない。決断力のない男というところからもきてい
た。

笹上は、定年直前であった。沖と同様、東洋物産という
別の会社に住居、扶桑商事へ吸収合併された外様の身であ
るが、うだつが上らなかつたのは、そのせいより、笹上自
身の「ウーさん」ぶりによるところが大きい。少なくとも
沖はそう理解しなかつた。それに、笹上は、ぐちっぽく、
一時は、酒も強かつた。社内では孤狼である。

ふたたび扶桑商事のコンピュータに即していえば、社員
一人一人について、自己診断による性格を五十項目、上司
による性格評価を五十項目、合わせて百項目を磁気ドラム
が記憶している。その中には、きつと、「シンチョウスギ
ル」「ハンダンガ オソイ」「フヘイガ オオイ」などとい
うものが、あるにちがいない。それらが錘となつて、「サ
サガミ ウシマツ」の名を、ついに浮き上らせることがな
かつた。

十文字が、沖の耳に、なお、ささやきかけた。

「お互い、ウーさんみたいには、なりたくないな」

そのとき、見送り人の輪がざわつき、その一角が開いて、
背の高い男があらわれた。十文字より、さらに長身。眼鏡
をかけ、学者風だが、背をそらせ、姿勢がいい。沖が帰国

後所属していた食料統轄部の本宮部長である。

本宮は、沖たちよりわずかに年上だけなのに、すでにA
級部長として、一級職にあつた。役員は目の前であり、群
を抜く昇進ぶりであつた。定年になつて、まだ五級職のウ
ーさんにくらべれば、新幹線とトロツコの開きがあつた。

見送り人たちの私語は消え、視線が本宮の一挙手一投足
に集まつた。本宮と目の合つた男たちは、気おされたよう
に、頭を下げた。

本宮は、「やあ」「やあ」と、一々、手をあげて、うなず
きながら、まっすぐ大股に沖の前へきて、握手を求めた。
すべて、フランス映画のしぐさ主役のように、スマートで
あつた。

「ごころうだね。しつかり、たのむよ」

本宮は、二度ほど強く沖の手をにぎりしめてから、和代
に向き直つて、軽く頭を下げた。

「帰国まもないのに、申訳ない。なにしろ、先任の支店長
が、急に倒れたもんやからねえ」

扶桑商事は、もともと、京の呉服商からはじまる関西系
商社であつた。このため、社内では、関西弁が羽ぶりをき
かせ、一時は関西弁をしゃべらぬと、一人前に扱われぬ空
気さえあつた。関西以外の出身者も、その空気になじみ、
関西風のなまりや表現が、つい、口に出たりする。もつと
も、原形となる関西弁も、京都弁・大阪弁・兵庫弁などが

縦横に入りまじって、扶桑商事弁とでも名づける他ないものになつていた――。

和代は、本宮に向かつて、最敬礼した。

「お忙しいのに、わざわざ……」

「なに、会社は、すぐ、そこやから、五分もあれば、すぐ、戻れます」

本宮は、「すぐ」を二度くり返した。そういえば、ひかり号も、定刻数分前。すぐにも、発車である。いや、本宮の顔を見たら、定刻前にも、発車してほしい感じであつた。「商事会社は商時会社や」というのが、社長の口ぐせであつた。ホームに居るわずかの時間の間にも、百二十を越す海外の支店網から、世界中の経済の動きを伝える最新の情報、通信衛星により、海底電線により、テレックス網により、刻々、流れこんできている。本宮のような重要人物の不在のため、一分間の判断のおくれが、何億かの損を招くことになりかねない。貴重な時をきさむ秒針の音が、沖夫婦の耳に、はつきりきこえてくる気がした。

ひとの動きが、あわただしくなつた。すでに、デッキに向かつて移動する見送り人もある。下のホームでは、東海道線の発車ベルが鳴りひびいていた。

和代は、祈るような目で、ホームの時計を見守つた。かんの息子の忍が、まだ着かない。和代は、夫よりは、はるかに息子のことが、わかつているつもりである。早退

するのをやめ、そのまま授業を続けているとは、とても、思えない。国電の乗り方など、まだよくのみこめなくて、どこかで、まごまごしているのだろうか。

ふいに、本宮が腰をかがめ、あけみに話しかけた。和代は、ぎくりとした。

「風邪でも、ひいたの」

「オ、ノー、アイ……」

あけみは、マスク越しに反射的に答えかけ、はつとした目つきで、和代を見上げて、黙つた。和代は、その先を、すくいとつていった。

「ええ、ちよつとばかり、風邪気味で。なにしろ、のどをやられているものですから」

あけみの目が、物問いたげに、和代と本宮を見くらべる。本宮は、よく気のつく男である。事情をすぐ読みとつた。

「そう。それなら、しゃべらない方がいいね」

ごく自然にいうと、ゆっくり、目を十文字に移した。

「どうやね、十文字君のところは」

さらに、その向うの笹上にも、声をかけた。顔と名前をよくおぼえるのも、本宮の実力のうちのひとつである。

「笹上さんは、今年はたしか……」

「ええ、あと二十日で、定年です」

「永いこと。御苦労でしたな。それで、行先はもう……」

「うーん」

笹上は、また「ウーさん」になった。

本宮は、そこでも、深入りを避けた。

「たいへんですな。今年のうちの定年退職者は、百二人になります」

「承知してます」

「このきびしい時節でしょ。あちこち、幹旋^{あつま}しようにも、とても、とても……。そうですか、あと二十日、すぐですな」

また「すぐ」が出る。その「すぐ」は、少し残酷な感じなのだが、本宮としては、口ぐせとして、つい出た形であった。それに「Aも、すぐ、やめる」「Bも、すぐ、やめる」と、やめることを指折り数えている空気が上層部に漂っている感じもした。

沖は、笹上の表情を、うかがった。部厚いレンズの奥に、小さな目が、ゴマ粒のように、死んでいる。もはや「ウー」とさえ、いわなくなりそうな顔に見えた。

酒が入ると、笹上の眼は、レンズごと、マッチの炎のように燃えた。二十年前、屋根裏部屋のようなロサンゼルス支店で、沖は、毎夜のように、その炎につき合わされたものである。あのころの怒りも、不平も、苦しみも、汗も、それらすべての燃料が、すでに燃えつきってしまった、いまの笹上の眼であった。

本宮は、それだけで、笹上たちを相手にするのをやめた。

沖夫婦に顔を戻すと、ついでに、二重あごで、ひかり号を指し、

「これのおかげで、京都は目と鼻の先。くしゃみの届きそうな距離や。ブラジルやレバノンあたりへ別居するのやないんだから、きみも、奥さんも、ひとつ、元氣を出して」
くだけた、親しみのある口調であった。それというのも、本宮は、ただの上司というだけでなく、東京の同じ府立中学の先輩で、在学中から知っている仲であった。だからこそ、わざわざ、見送りにきてくれた、ともいえた。

もつとも、扶桑商事では、社内にかくなる派閥もつくらぬため、同窓とか、同郷関係などで、社内が集まったり、グループをつくることは、一切厳禁である。出身校名は、人事カードから消され、コンピュータも、記憶していない。その点では、完全に近い実力主義が行われている形で、そこにも、毎年、全国の学生の就職希望、ベスト・スリーに入る人気があった。

十文字が、思いついたように、本宮に声をかけた。

「部長は、相変らず、早朝出勤ですか」

「そう、七時には来てるな」

本宮は、なんでもないことのように答えた。

「けど、そんな時間には……」

「もちろん、まだ掃除婦も来ていない。だから、あちこち電氣をつけながら、部屋へ行くんや」